

日本のこころ⑥「おくのほそ道」松尾芭蕉

1 ウォーミングアップ①

- ①放浪の旅
- ②（数学の）公式
- ③お決まりのパターン
- ④物見遊山
- ⑤天災・人災
- ⑥缶詰
- ⑦がれきの山
- ⑧紀行文
- ⑨海の幸山の幸
- ⑩せみ塚
- ⑪地に足がつかない人
- ⑫波乱万丈
- ⑬来た甲斐があった
- ⑭浮世離れしている
- ⑮不毛の地
- ⑯つづら折り
- ⑰その手は食わない
- ⑱しゃれ
- ⑲二次元
- ⑳ずんぐりむっくり

2 ウォーミングアップ②

- ①歌に詠みこまれた名所旧跡

- ②何の変哲もない地方の小都市

- ③いわれない差別

- ④義侠心に心打たれる

- ⑤この町は死者・行方不明者が一桁台だ。

- ⑥命からがら避難した被災者の仮設住宅

- ⑦私は自分の無神経さが恥ずかしい。

- ⑧被災地を行脚する

- ⑨音が途絶えた後の余韻を感じさせる

- ⑩彼らは天然の石垣と堀に囲まれた難攻不落の山城に立て籠る。

- ⑪どっしり落ち着いた屋敷と蔵がずらりと並ぶ。

- ⑫地方の有力者の邸宅に草鞋わらじを脱いだ

- ⑬洋の東西は異なれども、彼らは沈む夕日に永遠を感じた。

- ⑭彼女は数奇な運命をたどる

- ⑮日本酒に舌鼓を打つ

- ⑯彼は東京裁判で戦犯にならなかった。

⑰彼はつらい別れのなかに、遊び心を取り入れた。

⑱しゃれでは済まされない

⑲涙をかみしめながらしたたかに憂き世を生きていく知恵

⑳玄人向けの地味な資料館

2 翻訳

①あまりにも素晴らしく、言葉で言い表せなかったので、芭蕉は松島の句を詠まなかった。あえて書かずに「間」を効果的に生かすことによって読者の想像力を喚起したのだ。

②風評被害で苦しむ被災地を観光することで復興の一助にしたいと思う。

③彫刻でゴテゴテ飾り立て、金銀に丹青、白黒など相反する色であふれる東照宮は、枯淡の境地にあるイメージの芭蕉らしくない。

④芭蕉はこの海に浮かんでいた島々に風光明媚な中国的世界を見出し、西施を夢見た。その風景も自然の力で変わりはててしまった。

⑤それはつらい人生を嘆き悲しむりも、一歩ひいて情けない自分をくすっと笑って受け流し、新たな一歩を踏み出そう、という人生哲学だ。

3 通訳

- ①彼は東照宮を俗物的とし、本当の日本の美は自然を生かした桂離宮にある、と述べた
- ②奥州への憧れのベクトルは、古代中国に対する憧れとは正反対である。それは1980年代の日本人のシルクロードに対するまなざしに似ている。
- ③松島は日本一の風光明媚な地で、洞庭湖や西湖にも負けていない。日本三景どころか、「東洋三景」の一つが松島だ。
- ④俳諧の、ひいては世界観、死生観のコンセプトに「不易と流行」というものがある。「不易」とは永遠にして普遍的なもの、「流行」とは移ろいやすくはかないものをさす。
- ⑤上方や江戸との交流のある豪農や豪商たちは、なまりながらも江戸言葉や上方言葉を第二言語として話していた。

4 スピーチテーマ

- ①A 米どころ
B 数珠
C 七夕
- ②A 芸妓
B だじゃれ
C 密教
- ③A 手拭い
B 俳句
C 関所